

専門家の「論文不正」はなぜ発覚したのか。原発事故後、子育ての中で行政の「安全・安心」キャンペーンに疑問を持った一人の女性が立ち上がった。

2011年3月11日午後2時

46分——島明美（現在51歳）は福島県伊達市保原町の自宅居間

のテーブルでパソコンを開き、インターネットで調べものをしていて。突然、大きな揺れが来た。10分ほど前から何度も何度もインターネットの回線が切れ、「おかしいなあ」と思っていた矢先だった。

「地震だ」と思う間もなく、揺れはどんどん激しくなった。食

器棚の観音開きの扉が開いて陶器やガラスの食器が次々に落ちてきて割れ始めたのであわてて立ち上がり、食器棚にしがみつくとようにして扉を閉め、押さえて続けたが揺れはなかなか収まらなかつた。

大きな揺れが収まっても小さな余震が散発的に続き、近所の

「放射能を見えない化する実験台に私たちを使うな」 子育て中の親の怒りが原点

本田 雅和

東大名誉教授の論文不正を暴いた
福島県伊達市の島明美さん



かつての仮置き場跡地を眺める島明美 [しま あけみ・1969年生まれ。福島女子短大服飾美術科卒]。(2020年12月、福島市・信夫山。撮影/本田雅和)

小学校に通う2人の子どものことが気になった。外に出るとママ友の1人が「学校に迎えに行く」というが、島は「これだけ激しい地震なら足の踏み場もない家にいるよりも、学校の方が安全だろう」と判断。まずは床の割れた食器類を片付けた。

そのうち、小学5年生の長男が、3年生の長女や近所の低学年の子どもの手を引いたり、泣きださないようになだめたりしながら帰って来た。

断水、停電だったので、子どもたちを車に乗せ、近所のコンビニに買い出しに行った。どこも行列で、ようやく入れた店でも飲料水はすべて売り切れ。チヨコレート菓子とジュースが買えただけだった。夜になると、福島市内の会社に勤める夫も帰宅。その夜は菓子や保存食で済ませ、とりあえず無事に戻ってきた家族4人がかたまつて寝たが、空腹の記憶はない。

ラジオは開けたので沿岸部の津波のニュースは次々に入ってきた。時刻とともに被害の大きさが伝わり、余震におびえる子どもたちを不安がらせないためにも、あまり聞かないようにした。相馬市にある夫の実家も山の手にあつて無事だったし、会津地方の島の実家も、両親含めて全員無事の確認はできていた。

念頭のない原発事故

このときの島には、原発のことなど「全く頭になかつた」。沿岸部の東京電力福島第一原発からは約60キロメートル離れている。翌日からの相次ぐ水素爆発のニュースも入ってきたが、「どこか遠くの話のように聞い